

タブロイド地域紙「市民プレス」第64号(2014/4/5発行)の電子版として再編集しました。電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。またご利用の環境によっては、電子書籍の閲覧ができない場合がございます。

目次

- PAGE 2 一、承久の乱と執権政治 武家政権の行方は・・・その二
- PAGE 3 政権の混乱は続く -PAGE 9 後鳥羽上皇の国家構想 -PAGE 10 北条政子の作戦は成功する
- PAGE 12 鎌倉から京都に向けて出撃 -PAGE 14 政治は執権から得宗専制に -PAGE16 地頭と荘園
- PAGE 17 モンゴル帝国の拡大は・・・
- PAGE 26 二、鎌倉政権の滅亡 鎌倉時代の終焉
- PAGE 27 天皇親政と内乱の勃発 -PAGE 30 足利高氏の転機 -PAGE 31 新田義貞は鎌倉を陥落させる
- PAGE 38 Ⅱ 『太平記』と『梅松論』 Ⅱ -PAGE 39 年表

武家政権の行方は・・・その二

一、承久の乱と執権政治

朝廷との争いが火種となって

源頼朝の死後、正妻の政子が中核となり、北条氏の力が強化され、朝廷との軋轢が生じた。承久三年(1221)、後鳥羽上皇は、鎌倉幕府に対して打倒の兵を挙げ、承久の乱が勃発した。しかし後鳥羽方は大敗したので、朝廷の権力は弱体化し、武家政権の政治的な発言力が増大する。

頼家は家督を相続したが・・・

廻つて、建久十年(1199)一月、父・頼朝が急死すると、嫡男の頼家は家督を相続して、第二代鎌倉殿となる。時に十八才。頼家は自分の側近を重んじ、乳母一族である比企氏を重用して独裁的な政治を行なおうとした。

しかし三ヶ月後の四月、北条氏ら有力御家人による十三人の合議制が布かれ、これに反発した頼家は、小笠原長経、比企宗員、比企時員、中野能成以下若い近習五人を指名し、彼らに手向かつてはならないという命令を出した。

御家人が次々と追放されて・・・

そのため、頼朝在世中に抑えられていた有力御家人の不満が噴出し、御家人統制に辣腕を振るっていた侍所別当・梶原景時が弾劾を受けて失脚し、十二月に鎌倉から追放された(梶原景時の変)。

政権の混乱は続く

正治二年(1200)四月、北条時政は遠江守に任じられ、御家人として初の国司となった。時政の幕府内における序列は向上したが、将軍家外戚の地位は、北条氏から頼家の乳母父で舅である比企能員に移ったので、時政と比企氏の対立が激しくなる。

建仁二年(1202)七月、頼家は征夷大将軍に宣下されたが、同三年、急病に襲われる。この時機を捉えて、頼家の母・北条政子は、祖父・北条時政とともに、頼家の政治を止めさせ、代わって実権を握ろうとする。

比企能員の変

比企氏の当主に当たる能員は、頼家の愛妾で嫡男いちまん一幡を生んだ若狭局の父親に当る。そのため、北条時政は彼を脅威に感じていた。

建仁三年九月、時政は比企能員を自邸に呼び出して謀殺し、頼家の将軍位を廃して伊豆国修善寺に追放する。その後、彼は北条氏に暗殺されたという。

また時政は、自分の娘、阿波局が乳母を務めた頼家の弟で、十二才の千幡せんたを三代将軍に擁立し、自邸の名越亭に迎えて実権を握った。母・政子らは朝廷に対して、頼家が死去したという虚偽の報告を行ない、弟への家督継承の許可を求めた。これを受けた朝廷は千幡を征夷大将軍に補任した。

その年十月、千幡は十二才で元服し、実朝と称した。儀式に参じた御家人は大江広元、小山朝政、安達景盛、和田義盛ら百余名だった。

執権政治に向かう

幼い実朝に代わり、時政が単独に署名して、「関東下知状」が発給され、御家人たちの所領安堵以下の政務を行なった。十月には大江広元と並んで政所別当まんどころべつとうに就任し、幕府における専制を確立し、時政は初代の執権に就く。

畠山重忠の乱

元久二年（1205）六月、有力御家人の畠山重忠は、武蔵国の掌握を図る北条時政の策謀により、武蔵国二俣川（現・横浜市旭区保土ヶ谷区）で、次男の義時が率いる大軍に攻め滅ぼされた。北条氏による有力御家人排斥の一つである。

北条義時は二代執権として

元久二年閏七月、姉・政子と協力し、有力御家人・三浦義村（母方の従兄弟）の協力を得て父・時政を伊豆国に追放した義時は、父に代わって政所別当の地位に就き、「執権」の地位を引き継いだ。また、有力だった畠山重忠らの排除によつて、義時が信頼する弟の時房が武蔵国の守護・国司となる。

三代將軍は政所を整備する

当初は時政や政子、義時の補佐・後見を必要としたが、実朝は、やがて自ら將軍家政所を整備し、幕府の訴訟・政治制度を充実させていった。承元三年（1209）に従三位となつて公家に列すると、將軍家政所下文を発して政所に実権を集め、次々と新たな政策を展開していった。



源実朝像
國文学名家肖像集

將軍実朝は京風文化に傾倒

その政治には京都の影響が強く、京風の文化も積極的に取り入れられた。後鳥羽上皇の寵愛する女房だった坊門局（西御方）の姉妹に当る、坊門信清の娘・信子を正室に迎え、上皇が熱中していた蹴鞠と和歌に執心した。承元三年には自ら詠んだ和歌を藤原定家に送つて指導を求め、和歌は死後に『金槐和歌集』として纏められている。御所の寝殿を中心として整備し、東国に京風の文化空間を創つていった。



源実朝像
山梨県甲府市・善光寺像
鎌倉時代の作と伝えられる

和田合戦

建暦三年（1213）五月、有力御家人和田義盛の反乱が起ころ。鎌倉幕府創業の功臣で、侍所別当だった和田義盛は、二代執権北条義時から度重なる挑発を受けた。そのため北条氏を打倒すべく、姻戚・同族と結んで拳兵した。だが、將軍実朝を擁し、兵力に勝る幕府軍は圧倒的だったので、和田一族は力尽き、義盛は敗死した。

侍所は大きな権限をもっていた

侍所は古く「ざぶらいどころ」ともいわれ、「侍い」^{ざぶらい}、すなわち貴人の傍に控え、その身边

を警護する従者の詰所という意味であった。

治承四年（1180）十二月に遡る。源頼朝は富士川で平氏を討って鎌倉に戻り、和田義盛を侍所の別当に任命した。行事の警備などに当たる御家人の召集・指揮と、罪人の収監などを行なう要職で、大きな権限をもっていた。

所司、または侍所司と呼ばれる役職について御家人の中で、最高位の者を別当とい、建久三年（1192）、和田義盛に代わって梶原景時が侍所別当に就任した。正治二年（1200）、梶原の乱によって景時は討たれ、代わって和田義盛が再任される。しかし建暦三年の和田合戦によって義盛は討たれ、頼朝を支えた有力御家人は一掃された。以後、二代執権の北条義時、三代の泰時へと受け継がれ、和田合戦の勝利によって、北条氏の執権体制はより強固なものとなる。

実朝は鶴岡八幡宮で落命する

一方、建暦三年（この年十二月、改元されて、「建保元年」となる。『百鍊抄』によれば、天変地妖（大地震）が原因とされる）、將軍実朝は昇進を重ね、正三位、従二位、さらに、正二位に昇叙（二十二才）された。建保四年には、権中納言に転任、左近衛中将を兼任する。大江広元は、実朝のあまりに早い官位昇進を諫めたが、同六年には、権大納言に転任、さらに内大

臣、右大臣に転任（二十七才）。右大臣拜賀のため鶴岡八幡宮に詣でた直後のこと、建保七年（1919）二月廿七日、甥の公暁に襲われて実朝は殺害された。享年28／満26才没。

第四代將軍は・・・

実朝には子がいなかったため、次の將軍として、藤原摂関家からわずか二才の藤原頼経を迎え、北条政子が後見人となり、「尼將軍」と呼ばれた政子と執権・義時の権力は、ますます強くなった。

一方、後鳥羽上皇は、友好的だった実朝が世を去り、北条氏が実権を握ったため、幕府との関係の見直しを迫られることになった。

後鳥羽天皇は・・・

高倉天皇と修理大夫坊門信隆の娘殖子の子で、安徳天皇の異母弟に当る。寿永二年（1183）平氏が安徳天皇を伴って都落ちしたため、祖父後白河法皇の詔によって踐祚した。院政を行っていた後白河が没して後鳥羽天皇の親政となったが、実権は関白九条兼実が握っていた。同9年後鳥羽は皇子の土御門天皇に譲位して院政を始め、土御門・順徳・仲恭の三天皇の時代、二十三年にわたって院政を行ない、次第に独裁的な権力を振るうようになる。

上皇は芸能や武技に多才ぶりを発揮したが、特に和歌に長じ、建仁元年（1204）、和歌所を置いてすぐれた歌人を集め、同二年、勅撰集の命を下して『新古今和歌集』の撰進が始まった。同集の編集に当って、院自身が撰歌、配列などに関与し、後鳥羽院が実質的には撰者の一人であったことも明らかになっており、隠岐に流されたのちも、自ら追加・削除を行なったようだ。

後鳥羽上皇の国家構想

上皇は自らが国全体の頂点に立ち、公家も武家も上皇に仕えるべきであると考えていた。そこで鎌倉殿に対しては、將軍としてその役割を果たすことを期待した。ところが実朝が亡くなって、武家政権の実権を握った北条氏は、上皇のいうことを聞かなかつた。

例えば、後鳥羽上皇が寵愛した女性に与えた莊園があり、そこに幕府から任命された地頭を止めさせるよ

後鳥羽天皇像（紙本着色）

鎌倉時代の似絵の代表作（国宝）

後鳥羽上皇は承久の乱に敗れ、隠岐に配流される前に出家した。絵師藤原信実^{（註）}に命じて出家前の肖像画を描かせたと『吾妻鏡』に記されている。この像は、その絵に当るものという。

大阪府三島郡島本町、水無瀬神宮所蔵。同神宮は、後鳥羽天皇の離宮水無瀬殿の跡に建立され、後鳥羽天皇・土御門天皇・順徳天皇を祀る。



うに要求したところ、北条義時はそれを拒否した。そこで上皇と、執権・北条義時との関係は険悪となる。

上皇は院宣を発する

承久三年（1221）五月、上皇は「流鏑馬揃え」を口実に北面・西面武士や近国の武士、大番役の在京の武士二千七百騎を集め、京都守護の邸を襲撃した。さらに後鳥羽上皇は、全国^{（註）}の武士に北条義時追討の「院宣」を発した。

京方は院宣の効果^{（註）}を絶対視しており、諸国の武士はこぞつて味方すると確信していた。上皇挙兵の報に東国の武士は大いに動揺した。

北条政子の作戦は成功する

將軍の代行を務めていた北条政子は、鎌倉創設以来の頼朝の恩顧を御家人たちに対して訴え、「讒言に基づいた理不尽な義時追討の編旨を出して、鎌倉を滅ぼそうとしている上皇方を早く討伐して、実朝の遺業を引き継いでゆく」よう命じた。『承久記』には、政子が館の庭先にまで溢れるばかりの御家人たちを前に涙ながらの大演説を行ったことで彼らの心が動かされ、義時を中心に鎌倉武士を結集させることに成功した、と記されている。

『承久^{じよきゆう}乱記』は、承久の乱について記した公武の合戦記である。『承久^{いくさ}軍物語』『承久^{いくさ}兵乱記』などとも呼ばれ、保元・平治・平家と続く「四部之合戦書」の最後の戦記物に当る。鎌倉武士が王朝を崩壊に追い込むさまと、封建体制確立の過程を描く。完成度は高くないとされているが、後鳥羽院の描いた王政復古の夢を、首尾一貫した姿勢で、但しやや批判的に書いている。文体は和漢混淆体である。

一方『吾妻鏡』では、御家人の前に進み出た政子の傍らで安達景盛が政子の声明文を代読したと記され、「皆心を一にして奉るべし。これ最期の詞なり。故右大將軍朝敵を征罰し、關



北条政子(法名：安養院)像
鎌倉市大町・安養院蔵

伊豆の流人だった頼朝の妻となり、武家政権が樹立されると御台所と呼ばれる。夫の死後に落飾(落髪)して尼御台と呼ばれた。法名を安養院。頼朝亡きあと嫡男、次男が相次いで暗殺された後、京から招いた幼い藤原頼経の後見となり、幕政の実権を握り、世に尼將軍と称された。

「政子」の名は建保六年(1218)、従三位に叙されたとき、父・時政の名から一字取って命名されたもので、それ以前の名前は不明。

東を草創してより以降、官位と云ひ俸祿と云ひ、其の恩既に山嶽よりも高く、溟渤よりも深し。報謝の志これ淺からんや。而るに今逆臣の讒に依り非義の論旨を下さる。名を惜しむる族は、早く秀康・胤義等を討取り三代將軍の遺蹟を全うすべし。但し院中に參らんと慾する者は、只今申し切るべし」。

『吾妻鏡』承久三年辛巳五月十九日壬寅条(原文は変体漢文) 〓

演説だけで御家人たちを奮い立たせたという政子は、さすがだが、実は政子は演説の中で巧妙に「すりかえ」を行なつて、御家人たちを戦いに導いたようだ。そもそも後鳥羽が発した命令(院宣)の内容は、「義時追討」であつて、「鎌倉幕府打倒」ではない。義時(北条氏)さえいなくなれば、鎌倉幕府はつぶす必要はなく、自分が支配に利用できる^{とさえ}考えていたようである。

鎌倉から京都に向けて出撃

大江広元は京への積極的な出撃を主張し、政子の裁決で決定された。素早く兵を集め、軍勢を東海道、東山道、北陸道の三方から京に向けて派遣した。道々で兵力を増強したので、『吾妻



鎌倉から京都に向かって・・・

鏡』によれば最終的には十九万騎に膨れ上がったという。

敗れた上皇は配流される

わずか二ヶ月あとの七月、敗れた後鳥羽上皇は、上京した義時の嫡男・泰時によって、隠岐島（隠岐国海士郡の中ノ島、現・島根県隠岐郡海士町）に配流された。父の倒幕計画に協力した順徳上皇は佐渡島に流され、土御門上皇も自ら望んで土佐国に遷った。さらに、在位わずか三ヶ月足らずの仲恭天皇（当時四才）も廃され、代わりに高倉院の孫が皇位に就き、その父で皇位を踏んでいない後高倉院が院政をみることになる。

隠岐に流された後鳥羽上皇は、十八年間の侘しい暮しののち、延応元年（1239）、隠岐で世を去った。

武家政権は公武を二重に支配

幕府は、京都守護に代わって六波羅探題を置いて朝廷を監視し、治天の君を戴く京都の公家政権に交代して、皇位継承をはじめ朝廷の政治に干渉するようになる。

また、上皇に味方した貴族・武士の領地に、戦いに貢献した御家人を地頭として任命する権利を得て、幕府の力は畿内・西国まで及び、武家政権優位の体制が確立された。

執権政治の確立

承久の乱で幕府軍の総大将だった泰時は、父・義時の死後に第三代執権となり、源氏の将軍が三代で途絶えてからは、執権が幕府の実権を握ったのである。

泰時は、幕府の機構改革を始め、まず執権の補佐役として連署れんしよを設置し、また、御家人の中から評定衆ひょうじやうしゆを選び、執権・連署と合わせた合議で幕政を運営する形に改めた。

武士の法令「御成敗式目」

承久の乱の後、東国の武士たちが西国に地頭として派遣されると、その先々で土地をめぐる問題が多発した。そこで泰時は、土地に関する裁判基準の明確化を目指して、頼朝以来の先例と武家社会の慣習を文章にまとめた。

また、御家人の所領に関すること、武士の道徳、守護・地頭の権利と義務、裁判、家族制度などを明らかにして、貞永元年（1232）八月、『御成敗式目』（裁判の法令）を定めた。のちに「貞永式目」と呼ばれ、武家法の基本となる。

政治は執権から得宗専制に

御成敗式目の制定や執権政治の確立によって、基本的な構造が変わり、武家政権は安定し

ていく。そして、その中心となった北条氏の力はますます強まっていき、特に、五代執権・時頼のところからは、得宗の勢いが強まった。

得宗とは、北条氏の本流の血筋（北条氏という一族のトップ＝権威）のことで、執権という役職には得宗家以外の北条氏一族もなれたのだが、得宗は生まれによって決められていた。執権などの地位は次第に形式的なものとなり、「得宗専制政治」と呼ばれる体制へと移っていった。八代執権・時宗のころ、得宗の権力は大きなものとなる。



- | | |
|----|------|
| 16 | 北条守時 |
| 15 | 北条貞頼 |
| 14 | 北条高時 |
| 13 | 北条基時 |
| 12 | 北条照時 |
| 11 | 北条宗宣 |
| 10 | 北条時宗 |
| 9 | 北条貞時 |
| 8 | 北条時宗 |
| 7 | 北条政村 |
| 6 | 北条長時 |
| 5 | 北条時頼 |
| 4 | 北条経時 |
| 3 | 北条泰時 |
| 2 | 北条義時 |
| 1 | 北条時政 |

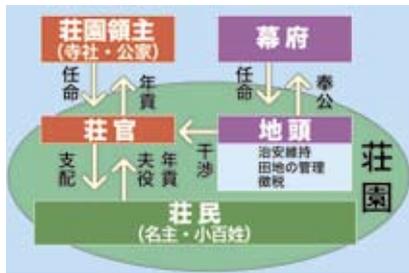
執権（初代～十六代まで）

地頭と荘園

地頭とは、頼朝が荘園や公領に置いたものであるが、もともと荘園には、荘園領主から派遣された荘官がいて、荘園を管理して年貢を領主に送っていた。

承久の乱で上皇に味方した貴族・武士の所領（荘園・公領）は取り上げられ、幕府の御家人が地頭として任命された。その所領の多くは西国にあつたので、幕府の力は西国に及んでいった。

幕府から任命された地頭は、治安維持や年貢の取り立てなどを行なうようになり、現地では、武力を背景にして、荘園での権益・支配を拡大しようとした。取り立てた年貢を荘園領主に送らずに着服したり、決められた以上の税や労働力を農民に強制したりした。「地頭の荘園侵略」といわれるものである。毛利氏のように、後の戦国大名になるものもいた。



例えば武蔵国の片山氏は・・・

承久四年（1222）、片山右馬允広忠は、承久の乱における勲功賞として、丹波国の荘園、「和知荘」（現・京都府船井郡京丹波町）の地頭に補任（職に任命）される。彼は武蔵国新

座郡片山郷を名字の地とし、移住した後も関東御家人として、片山郷に本領を持ち続けたが、一方、新領地の経営に努め、下地したじ(土地)や荘民への権限拡大を図っていた。この地は京都府のほぼ中央に位置し、山林で覆われていたが、片山氏は未墾地の開発を行なって勢力を蓄え、丹波の国人領主へと成長した。

現在も同地に居住する片山氏の許に残された文書群は、丹波の中世史の貴重な資料となっている。

モンゴル帝国の拡大は・・・

アジア大陸で大国、モンゴル帝国が拡大し、アジア諸国、諸民族とともに、日本も共通の運命に曝された。鎌倉幕府が経験したモンゴル襲来は、日本が本格的に外国から攻められた大事件とされている。

13世紀の初め、モンゴル高原に現われたチンギス・ハンはモンゴル帝国を築き、強力な騎馬軍団を武器に、ユーラシア大陸の各地に勢力を広げていった。その領土はヨーロッパの東部からイラク、さらに東アジアに及び、世界史上かつてない規模のものとなった。

朝鮮半島に侵攻

1231年以降、モンゴル軍は朝鮮半島の高麗に繰り返し侵攻、1259年、高麗は遂にモンゴルに従う属国となる。

1260年にモンゴル帝国の皇帝となったフビライは、中国の北半分を押さえ、現在の北京の地に大都という都を築いた。1271年には国号、国の呼び名を中国風の「元」に改め、皇帝フビライは、中国の南半分を支配していた南宋を征服しようとした。また、東の海上に浮かぶ日本国をも視野に入れる。

国書をもつて対島に・・・

1267年の末、モンゴル帝国・フビライの国書を携えた高麗の使者が、日本の対馬にやってきた。その内容は、日本と友好関係を結んで交流したいというものだったが、「できるだけ武力は用いたくない」と書かれていた。この国書に警戒感を抱いた鎌倉幕府では北条時宗が執権となり、防衛体制を整えてゆく。

モンゴルに抵抗した『三別抄』

1270年、朝鮮半島の高麗では、国内の反乱鎮圧などのための臨時に編成された『三別抄』という軍隊が、モンゴル帝国への抵抗に立ち上がった。江華島(現・韓国の首都ソウルに近くに所在)



に置かれていた本拠地を南方の珍島に移し、さらに耽羅（現・済州島）へと移動して抵抗を続けたが、1273年、済州城が陥落して乱は終わった。

モンゴルの二度にわたる侵攻

モンゴルは東アジアの征服に莫大な労力を使っていたが、日本に対しては、1268年、国書を送って六年後の1273年に、本格的な戦いを挑んで来た（文永の役）。1279年、南宋は元に滅ぼされたが、1281年には、再度日本を襲い、九州に侵攻した（弘安の役）。蒙古襲来ともいわれるが、江戸時代後期から「元寇」と呼称される。

文永の役

文永十一年（1274）十月五日、モンゴルと高麗の連合軍は、船七、九百隻余り、兵士二、五〇二万の規模で対馬に姿を現わした。

対馬の守護兵を破り、杵岐に侵入し、二十日、博多湾岸に上陸して陣を布いた。

肥後国の御家人・竹崎季長らは博多湾に向かい、各所で元軍と戦った。モンゴル軍の戦法は、日本の武士のように「対二で名乗りあつて戦うのではなく、銅鑼や鐘の合図に合わせて整然と集団で戦い、武器の弓矢は小型で接近戦に



適していた。さらに「てつほう」という火薬を使った飛び道具は日本側を驚かせた。

日本側は敵に押され、大宰府まで退いた。一方モンゴル軍はいったんは博多に入ったが、まもなく船に引き揚げて撤退した。モンゴル側が、優勢だったにもかかわらず撤退した理由については、（一）暴風雨説、（二）初めの予定通りの撤退、（三）モンゴル・高麗の混成軍の内部で対立が起きたという説などがある。

その後、モンゴル軍が再び攻めてくると考えた幕府は、防衛体制を強め、敵の上陸を阻止するため博多湾沿岸に高さ3メートルの石の防壁をおよそ20キロにわたって築いた。この石壁はいまも博多湾岸に残っている。

弘安の役

元は1279年、南宋を滅ぼし、中国全土を支配下に収め、中国南部の貿易都市・泉州などで、日本を再び攻めるための軍船を作り始める。弘安四年（1281）、高麗から東路軍四万が、また中国の沿岸からは江南軍十万が日本へと出発した。

六月六日、まず東路軍が福岡の志賀島に来襲。ここで幕府が作らせた石の防壁が効果を発





揮したため、東路軍は本格的に上陸することができず、一度は退いた。

七月、ようやく江南軍が到着、東路軍と合流して長崎県鷹島付近に集まった。

しかしその時、暴風雨が艦隊を襲い、多くの船を失ったモンゴル軍に、日本の兵士が襲いかかり、元や高麗の兵士たちを倒していった。十四万ものモンゴル軍のうち、生きて戻れた者は、三万数千人に過ぎなかったといわれている。

モンゴルに勝てたのは・・・

(1) 日本側の小舟によるゲリラ的な戦術と防壁、(2) 東路軍・江南軍の船が粗悪で、互いの連絡が悪かった、(3) 暴風雨に襲われた(「神風」が吹いたのでは)、などの要因によるとされているが、御家人の奮闘振りは顕著で、命をかけて戦ったのは恩賞が目的だったようだ。

蒙古襲来絵詞えことば

二巻の絵巻物で、鎌倉時代後期の作。肥後国の御家人竹崎季長が元寇における自らの戦いを

描かせたものとされている。

絵巻を描かせた御家人は・・・

竹崎季長は、裁判で敗れて土地・財産を失ない、困っていたので、文永の役で手柄を立て、所領を手に入れることを目論んでいた。ところが、勇敢に戦ったのに、その手柄が鎌倉にきちんと報告されていなかった。そこで季長は文永の役の後、恩賞奉行の安達泰盛に直訴し、その甲斐があつて故郷近くの地の地頭に任じられた。

季長は次の弘安の役でも活躍したが、ずっと後になつて絵巻を作らせた目的は、功績を挙げ、て恩賞を得たことの記念、恩人安達泰盛への感謝の印と考えられている。

恩賞の対象として

御家人だけでなく、異国降伏の祈禱を行なつた神社、御家人以外の武士≡非御家人も考えな

宮内庁所蔵 前巻、絵七。(文永の役) 矢・槍・

てつはらの飛び交う中、馬を射られながら蒙古軍に突撃する竹崎季長と、応戦・逃亡する蒙古兵(註)この季長苦戦の場面には、あとから加筆された箇所があると見られている。特に三人のモンゴル兵を他の場面のそれと比べて分かるのは、季長の奮戦ぶりを強調したかったのであろう。



ければならなかった。幕府は対外戦争という非常事態の中で、その支配力を御家人以外にも拡大して強化したので、その体制を三度目のモンゴル襲来にも備えるために、維持していかねばならなくなつたのである。

恩賞奉行の安達泰盛は・・・

執権・北条時宗を外戚として支え、有力御家人として鎌倉政権の重職を歴任してきた安達は、將軍の名のもとに御家人だけでなくすべての武士の力を結集して新しい体制づくりを目指そうとした。しかし、將軍を中心になると、得宗⇨北条氏の本流の立場が弱くなつてしまうので、この政治改革は、得宗家の家臣の反発を招いた。

霜月騒動とは

泰盛の路線は、得宗家の家臣の代表だつた内管領・平頼綱との対立を生み、また、非御家人を組み込むことには御家人の反発もあつて、泰盛は孤立した。弘安八年十一月（1285）、安達泰盛は一族と共に滅ぼされ、全国で泰盛派が弾圧された。十一月⇨霜月に起こつたため、霜月騒動と呼ばれている。

仏教の新しい動きが活発に

当時、京都と並ぶ政治の中心地だつた鎌倉では、宗教活動も活発に繰り広げられていた。

円覚寺の創建

幕府は、中国から伝えられた禅宗、特にその一派である臨済宗を積極的に支援した。弘安の翌年、弘安五年（1282）のことになる。北条時宗は、文永・弘安の役で犠牲となつた敵味方の兵士の霊を慰めるため、中国から来日した禅僧・無学祖元に、「円覚寺」を創建させた。

医療施設をもつた「極楽寺」

一方、律宗のように、社会事業に力を入れる宗派もあつて、二代執権北条義時の三男、重時が開基したと伝えられる「極楽寺」には、境内に病室などの医療施設が建てられ、数多くの病人を治療していたという。

広大な寺院の全体を描いた「極楽寺境内絵図」が残されているが、記録や伝承などをもとにして極楽寺の盛時の姿を偲び、江戸時代に作成されたと伝えられている。

また日蓮は、モンゴル襲来という国の危機を背景に、「法華経を信じなければ日本は滅ぶ」として、幕府から弾圧されながらも信者を増やしていた。

踊念仏は民衆の支持を得た

時宗という新しい宗派を開いた一遍いっぺんは、布教しようと鎌倉を訪れた。彼は寺をもたず、少数の弟子と共に全国各地を旅し、行く先々で民衆に「念仏札」を配って、念仏を勧めた。やがて一遍や信者たちの唱える念仏は、踊念仏という形に高まっていった。踊念仏とは、太鼓や鉦などを打ち鳴らし、「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えながら踊るもので、阿弥陀仏に救われる喜びを表わすといわれる。円覚寺ができた年、1282年、一遍の一行は、鎌倉の町に入ろうとしたところ幕府側に阻まれ、一遍は結局鎌倉入りを果たせなかった。しかし近くの片瀬の浜で踊念仏を行ない、民衆の圧倒的な支持を得た。

『一遍上人絵伝』（一遍聖絵）

時宗の開祖、一遍を描いた絵巻。奥書によれば、正安元年（1299）一遍の弟子にあたる聖戒しやうけいが詞書を起草し、法眼ほうがんの地位にあった画僧の円伊えんいが絵を描いたという。



国宝「一遍聖絵」第五巻より
北条時宗に鎌倉入りを阻止される。

神奈川県藤沢市・清浄光寺蔵（京都・歎喜光寺旧蔵）

みずぼらしい姿の一遍上人一行は、集団で移動していたが、あとからは物ぞいもついていったので、武士から追われた。時の権力者であった北条時宗に対して、毅然とした一遍の態度は、人々に感銘を与えたのでは、と推測される。

二、鎌倉政権の滅亡

鎌倉時代の終焉

「悪党」の活発化

モンゴル襲来の後、社会は変動し、混乱の世相となる。当時の史料を見ると、正安・乾元1299～1303年のころ、各地で、海賊や強盗、山賊が、十人、二十人で城に籠り、荘園領主や幕府に武力で対抗したことが記されている。支配者側からは「悪党」と呼ばれていた。正中・嘉暦1324～29年のころになると、「悪党」は、五十騎、百騎で行動する大きな武力集団となり、国の大半は、その言いなりになったという。

得宗専制となつて

乱れた世相になっても、武家政権の中核となつた評定衆などを、また地方では守護の要職を北条氏一門が占める。得宗家の力は強大なので、得宗の家臣が政治を勝手に動かす事態となり、また、得宗家の領地も拡大していった。

そのため、御家人の不満は高まり、最後の得宗・北条高時のころ、得宗家の御内人・内管領の職にあつた長崎円喜・高資父子は実権を握っていたので、その力への反発から、政権は御家人の支持を失い、長崎父子は政権崩壊の悪役として後世に名を残した。

天皇親政と内乱の勃発

後醍醐天皇の不満は・・・

文保二年（1318）、花園天皇の讓位を受けて三十一才で即位、第九十六代天皇となつた後醍醐は、後宇多法皇（九十二代天皇）の遺言状に基づいて、兄後二条天皇（九十四代）の遺児の邦良親王が成人して皇位につくまでの中継ぎと位置づけられていた。そのため不満を募らせていたが、一方鎌倉政権は、後宇多法皇の皇位継承計画を承認し保障していたので、幕府には反感をもつようになる。

皇位継承の争い

このころ天皇家は、皇位継承を巡って、持明院統と大覚寺統という二つの系統が対立するようになったが、それぞれが鎌倉政権に正当性を認めるよう働きかけたため、幕府は、両統が交代で天皇となることを提唱した。これを両統迭立てつりたてという。八十八代後嵯峨天皇の第三皇子、後深草天皇（八十九代）の子孫を「持明院統」、また、第四皇子、龜山天皇（九十代）の子孫を「大覚寺統」といい、その間で皇位の継承が行なわれた。それぞれ所縁の持仏堂、寺院に由来する名称である。

こうして、後伏見、後二条、花園と天皇が交互に即位し、「持明院統」の花園天皇の次に中継ぎだった後醍醐は、「大覚寺統」の後二条天皇の第一皇子、邦良親王を皇太子とした。ただし、正中三年（1326）に邦良親王が亡くなったので、その子、量仁親王なげひと（後の光厳天皇）を皇太子とした。しかし、後醍醐天皇は我が子に皇位を継がせたかった。

親政を復活し政権の打倒を図る

宋学に傾倒し、君主独裁を目指していた後醍醐は、院政ではなく天皇による政治に親政を復活し、専制的な政治を展開する。さらに幕府打倒を図って、正中元年（1324）、近臣を集め、無礼講と呼ばれる宴会を催した。馬鹿騒ぎを装って、極秘に倒幕の計画を話し合っ

たが、この謀議は幕府に発覚して未遂に終わる（正中の変）。六波羅探題は天皇の側近を処分したが、後醍醐には処分を行なわなかった。

再び挙兵したが敗れて隠岐に

元徳三年（1331）八月、再度の倒幕計画が側近の密告によつて発覚した。厳しく追及された後醍醐は、「元徳」から「元弘」へと改元して詔書を下した。しかし幕府はこれを認めず、「元徳」の元号を使い続けた。

後醍醐は身辺に危険が迫つたため、急遽京都からの脱出を決断し、三種の神器を持つて挙兵する。はじめ比叡山に拠ろうとしたが失敗し、笠置山（現・京都府相楽郡笠置町内）に籠城した。しかし圧倒的な兵力をもつ幕府の前に落城して捕えられる（元弘の乱）。

幕府は持明院統の光厳天皇を即位させ、元号を「正慶」と改めさせるとともに、元弘二年／正慶元年（1332）三月、捕虜となつた後醍醐は、承久の乱の先例に従つて謀反人とされ、出雲国の隠岐島に配流された。

幕府の大軍を相手に奮戦する

しかし、後醍醐の皇子・護良親王が父の意志を継ぎ、討幕の令旨を各地の反幕府勢力に送つた。同年十二月、奈良の吉野で挙兵、また、河内国の武士、楠木正成も挙兵して、反幕府勢

力を結集した。

正成は、河内国南部の山間やまのまわいにある千早城に立て籠り、攻め上ろうとする幕府の兵に煮え立つた油を浴びせかけるなど、数々の奇抜な戦いで幕府軍の大軍を悩ませた。幕府軍が千早城を落とせずにいることは各地に伝えられ、幕府打倒の機運は高まっていた。

隠岐を脱出して兵を挙げる……

機を見るに敏だつた後醍醐は、元弘三年／正慶二年（1333）閏二月、名和長年ら名和一族を頼つて隠岐島から脱出、伯耆国の船上山ほうぎのくにのせんじょうざん（現・鳥取県東伯郡琴浦町）に入つて倒幕の論旨を天下に発した。対する鎌倉政権は、後醍醐を討つため、足利高氏、北条（または名越なごえ）高家らの援兵を送り込んだ。

足利高氏の転機

高氏は妻登子・嫡男千寿王（のちの義詮）を同行しようとしたが、幕府は人質として二人を鎌倉に残留させていた。ところが、源氏の流れを汲む足利高氏は、平氏の後裔と自称しながら「鎌倉殿」を引き継いだ北条氏に反感をもち、何時の日か、自ら幕府を開くことを考えていたのではあるまいか。

四月、集中的な攻撃を受けた名越高家は敢え無く戦死を遂げる。勅命を受けた高氏は、後醍醐の誘いを受け入れ、天皇方につくことを決意し、所領だった丹波国篠村八幡宮（現・京都府亀岡市）で反幕府の兵を挙げた。諸国に軍勢催促状を発し、播磨国の赤松中心、近江国の佐々木導誉らの反幕府勢力を糾合して入洛、五月、六波羅を攻撃する。

六波羅探題は消滅する

北条仲時、北条時益ら六波羅探題の一族郎党四百人余りは、東国に逃れようとしたが、行く手を阻まれ、近江国（現・滋賀県）の蓮華寺で討死・自決した。

新田義貞は鎌倉を陥落させる

一方、同年の五月、稲村ヶ崎を突破した義貞の軍勢は鎌倉へ乱入し、幕府軍を前後から挟み撃ちにして壊滅させた。北条高時ら北条一族は、菩提寺の東勝寺にて自害（東勝寺合戦）、鎌倉幕府は滅亡した。鎌倉街道を南下した義貞の攻撃は、拳兵から二週間という速さだった。

東国の新田義貞は・・・

正安三年（1301）に生まれ、文保元年（1317）のころ、上野国（群馬県）にったのしょう新田荘を本拠地とする新田一族の家督を継いだ義貞は、元弘元年（1331）から始まった元弘の乱では、

大番役として警備のため上洛していた。河内国で拳兵した楠木正成の討伐のため、元弘二年／正慶元年（1332）幕府に従って、千早城の戦いに参加した。

しかし、義貞は病気を理由に無断で新田荘へと帰還する。後醍醐天皇と護良親王の両者から綿旨を受け取ったためともいわれるが、確かではない。

倒幕のため旗揚げする

翌元弘三年／正慶二年、執権北条氏の守護国である上野国で、楠木合戦の戦費調達のための過酷な徴集をとがめ、幕府に対する公然たる反抗に転じた。五月、幕府による誅伐の機先を制して拳兵する。荘内一井郷の生品明神で旗揚げしたと伝えられ、現在、群馬県太田市新田市野井町に所在する生品神社境内は、新田義貞拳兵伝説地として国の史跡に指定されている。

利根川を渡る・・・

幕府方の上野守護所に攻め入って壊滅させ、幸先の良い勝利を収めた義貞軍は体勢を整え、利根川を越え、越後や信濃・甲斐国の新田一族などと合流した。七千もの大軍に膨れ上がった新田勢は鎌倉を目指して二気呵成に進撃した。

利根川を渡って武蔵国に入ると、鎌倉を脱出してきた足利尊氏の嫡男・千寿王（後の足利義詮）と合流する。足利尊氏の嫡男と合流したため、義貞の軍に加わろうとする者はさらに

増え、各地から兵士が集まって、『太平記』によれば、二十万七千騎と記され、義貞の挙兵は尊氏の要請に応じて行なわれたものと看做す解釈もある。

鎌倉街道を南下する

さらに新田軍は鎌倉街道を進み、入間川を渡り小手指原（埼玉県所沢市小手指町付近）に達して幕府軍と衝突する（小手指原の戦い）。戦闘は三十回を越える激戦だったという。兵の数は幕府軍の方が勝っていたが、同様に幕府へ不満を募らせていた河越氏ら武蔵の御家人の援護を得て新田軍は次第に有利になっていった。

分倍河原の戦い

しかし一旦退却した幕府軍は、分倍河原に布陣して、新田軍と決戦を開始する（分倍河原の戦い）。『太平記』には、この合戦における両軍の軍勢の構成や、採用した戦法について、詳らかに記述されている。

義貞は幕府軍に奇襲を仕掛け、幕府軍の増援隊の寝返りなどがあつて大勝したが、その背景には、恐らく足利高氏による六波羅探題滅亡の報が到達していたのではないかと考えられている。翌日、多摩川を渡り、幕府の関所である霞ノ関（東京都多摩市関戸）にて幕府軍の北条泰家と決戦が行われ、新田軍は勝利を収めた（関戸の戦い）。

新田義貞と稲村ヶ崎

藤沢（神奈川県藤沢市）まで兵を進めた義貞は、部隊を三隊に分割した。義貞の本隊が化粧坂切通し、大館宗氏と江田行義の部隊が極楽寺坂切通し方面から、堀口貞満、大島守



作者と成立時期は不詳だが、法勝寺の恵鎮、玄慧など足利幕府との密接な関わりを持つ知識人が編纂したと考えられている。増補改定されて全巻が完成、全四十巻。

吉川英治の作品、『私本太平記』は、NHKによって「大河ドラマ」となり、1991年に放映された。

『梅松論』は、『太平記』と双璧をなす軍記物語。筆者は不詳だが、足利尊氏の側近で、例えば、後醍醐天皇の要望によって南禅寺の住持となり、また天龍寺を開山した夢窓疎石か、とも推量されている。

鎌倉幕府の治績から尊氏が政権を掌握するまで、足利氏による室町幕府創立の正当性を主張する視点から描き、貞和五年（1349）ごろ成立した。

全二巻。

なお、十四世紀後半の成立と推測される『神明鏡』しんめいかがみは、神武天皇から後花園天皇にいたる年代記（上下二巻、作者不詳）であるが、時代が下るにつれ、『太平記』、『梅松論』に記された合戦譚の記事が目立つようになり、それらが成立した時期を裏付けている。

Ⅱ 「軍記物語」は・・・

歴史上の合戦を題材として、各時代の展開を反映した叙事的な物語。武勇伝や恋愛話などを後世に伝えることを意図したフィクションで、必ずしも事実を忠実に記したものではない。文体は多く和漢混交文で、「平家物語」のように琵琶法師などによって語られた「語り物」（口誦文芸）の要素をもつ。

『将門記』（平将門の乱）、『保元物語』・『平治物語』（保元・平治の乱）、『平家物語』（源平合戦）、『承久記』（承久の乱）、『太平記』、『梅松論』、『明德記』、『永享記』、『応仁記』（応仁の乱）、また芸能軍記として『義経記』、『曾我物語』など。

1300	1200
<p>建久二年 (1193) 後醍醐天皇即位する</p> <p>正中元年 (1324) 倒幕計画の発覚 (正中の変)</p> <p>元弘二年 (1332) 後醍醐、隠岐に流刑</p> <p>元弘三年 / 正慶二年 (1333) 鎌倉幕府は滅亡する</p> <p>建武三年 / 延元元年 (1336) 後醍醐天皇、吉野に移る</p>	<p>建久十年 (1199) 源頼朝が急死</p> <p>元久二年 (1206) 畠山重忠の乱</p> <p>建保七年 (1219) 源實朝暗殺される</p> <p>承久三年 (1231) 承久の乱が起る</p> <p>貞永元年 (1233) 北条泰時『御成敗式目』を定める</p> <p>文永十一年 (1274) 文永の役 (元寇 / 蒙古襲来)</p> <p>弘安四年 (1281) 弘安の役 (元寇 / 蒙古襲来)</p>
鎌倉時代	

「市民フォーラム」は・・・

地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

地域情報紙「市民プレス」は市民フォーラムが編集・発行し、無料で配布しています。

読者の「オピニオン」(意見・感想)をお寄せ下さい。

TEL090 (3048) 5502

編集部 原宛にお願いします

本紙「市民プレス」は年四回(一、四、七、十月、各五日)発行